

Title	ピーター・クラーク「近代イギリスの選挙社会学」 (三)(翻訳)
Author(s)	クラーク, ピーター; 岡田, 新
Citation	大阪外国語大学論集. 11 p.221-p.230
Issue Date	1994-08-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79652
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ピーター・クラーク

「近代イギリスの選挙社会学」(三)(翻訳)

岡田 新

(9)

1886年以後、労働者階級の票は、自由党にとって最後に残された希望であった。このことは、周知の事実である。だから、第二次選挙法改正後の保守党に起ったのと比べられるべき転換が、第三次選挙法改正以後の自由党にも、起ったかどうか。これを調べてみる必要がある。その兆候は1890年代には、ほとんど見られなかった。1890年代の自由党は、ますます「ケルト系周辺部」に依存しなければならなかったのである。⁽¹⁰⁷⁾

自由党は1892年に、一時的に党勢を回復した。だがその後1895年には、どん底に落ち込む。ウエールズですら、自由党は際だった後退を記録している。⁽¹⁰⁸⁾ ノーサンプトンシャーの自由党も、「復活」を見せていたが、ここでも自由党は、1895年には、狭い宗派的な地盤に立ち戻ってしまった。⁽¹⁰⁹⁾ ロンドンの自由党も、労働者の票を足場に復活を見せたが、その勢いは次第に失われ、ついには全く意気消沈してしまった。⁽¹¹⁰⁾ 同じくランカシャーでも、自由党の限界は明かであり、1895年には破滅的な敗北を喫している。⁽¹¹¹⁾ 「ロンドンとランカシャーだけで、トーリーが100議席を上回る固い地盤を持っている限り、自由党の勝利は不可能であろう。」マンチェスター・ガーディアンも、こう認めていた。しかしこの二つの地域、ロンドンとランカシャーでの自由党の再生こそ、1906年以降、自由党が政権につくことができた原因であった。従って、この地域の自由党の再生が、どんな基盤の上に可能だったか。問題は、まさにこの点にある。⁽¹¹²⁾

既に見たように、ロンドンでは、早くから階級が投票行動に影響を及ぼしていた。1880年代には、ロンドンでは、投票行動は、もっぱら階級の区別によって決定されていた。富裕な層は統一党を支持し、この支持は、アイルランド自治問題によって、更に強まった。⁽¹¹³⁾ ロンドンでは、宗教組織が脆弱であり、このため、経済が強い影響を及ぼしたのである。ロンドンでも保守党は、アングリカンが多数派の地域で支持を集め、自由党は、非国教徒から支持をとりつけていた。にもかかわらず、こうした伝統的な政党への忠誠心は、既にかなり弱まっていたのである。

ポール・トムプソン (Paul Thompson) 博士は、自由党は衰退しつつあった、と論じている。博士によれば、エドワード朝の自由党の復活は、真の再生ではなかった。それは、非国教徒の復興と労働者の支持が偶然に一致したために起ったものであった。しかしこれはどちらも、一時的な現象に過ぎなかった。1914年まで、労働組合の自由党支持は、労働党支持と肩をならべていた。

博士もこれを認める。だが博士によれば、未来は労働党の側にあった。自由党の再生は、自由党の抱えていた問題を、本当に解決したものではなく、自由党は、依然労働者の固い支持を獲得できなかったのである。⁽¹¹⁴⁾ 博士のこの見解は、広く支持されている。しかしここには疑う余地があることを指摘したい。自由党は、1910年12月には、24の中産階級の選挙区のうち18議席を獲得したに過ぎなかった。だが自由党は、労働者階級が支配的な27の選挙区では、24議席も獲得している。この点を考えるならば、自由党のこの選挙での闘いぶりを、博士の言うように「階級なき改革の党」と呼ぶことは、果して適切であろうか。⁽¹¹⁵⁾

ランカシャーでは、1910年の投票のパターンと、その25年前の投票のパターンとの間には、鋭い違いがある。綿産業が盛んなバラ選挙区のほとんどで、1885年と1910年の12月の間に、保守党の得票は、5%も落ち込んだ。アイルランド自治問題が頂点に達した1892年の保守党の得票を、1910年1月の得票と比べると、保守党は、事実上すべての都市近郊の労働者階級の選挙区で、5%ないし10%にもおよぶ落ち込みをみせている。⁽¹¹⁶⁾ ブラックバーン（Blackburn）を例にとると、この票の動きが、政治のスタイルの質的な変化を表わしていることは明かである。身分に基礎を置く古い政治の構造は、地方の宗教的なコミュニティの拮抗と密接に結び付き、保守党を助けていた。自由党と労働党は、本質的に階級に基礎を置く、進歩的な政治綱領を推進する全国的な枠組みの中で、協力していたのである。⁽¹¹⁷⁾

しかしランカシャーのこの変化は、どれほど全国の趨勢を表わしていたのであろうか。非国教徒が例外的に強力であったウエールズでは、1904-5年に起った宗教の復興が、1906年の自由党の勝利に熱気を与え、ウエールズの選挙では、自由党は、1914年まで善戦したのであった。自由党の支持基盤が、どれほど変化していたのかは確かに疑問である。⁽¹¹⁸⁾ この点は、さまざまな地域の調査結果を待つべきであろう。ランカシャーが、宗教から福祉へと選挙政治の軸心が明確に転換した典型例であった、とは言い難い。ロンドンでは、既に階級の線に沿って投票が行われていた。だからロンドンでは、選挙の変貌は、革新票の増加によって示された。ヨークシャーとウエールズは、非国教徒が強く、既に堅固な自由党地域であった。このため、ここでは、新しい政治の衝撃は隠されてしまった。しかしランカシャーには、労働者階級の保守主義を支えるアングリカンとプロテスタントの伝統があった。このため、ランカシャーでは、選挙政治の変化は、明確に政党の変化として現われたのである。

もしこうした見方が正しいとすれば、イングランドでは、第一次大戦の前までに、階級に基盤を置く現代的な形態の政治が出現し、1910年選挙での自由党の勝利の背景の力となっていたのである。もちろん通常は、こうした発展はもっと後の時代のものとされ、労働党の勃興と軌を一にしたものだと考えられている。確かに、1906年に選出された労働党議員の一団は、政治の新しい局面を示している。しかし選挙の上では、労働党の勃興はどんな意味があったのであろうか。この時期の労働党史についての労作によれば、新しい政党の目的は、かなり限定されていた。そして労働党の議会勢力としての登場は、自由党の院内幹事と労働党との選挙協定（1903年のグラッ

ドストーン＝マクドナルド協定)の条件に基づいていたのである。⁽¹²⁰⁾ つまり、この時期の労働党の伸長は、制度的な発展の結果であり、選挙における党勢の拡大の帰結ではなかった。1908年には、炭鉱夫組合が労働党への加盟を決定し、炭鉱夫組合の自由＝労働派 (Lib-Lab) 議員が、労働党に合流した。これが制度的な発展の重要な一例である。

ここに重大な転換を見る歴史家もいる。⁽¹²¹⁾あるいはそうかもしれない。だが、ここで私が指摘したいのは、これは選挙での革命ではなかった、ということである。炭鉱夫は、今までと同じように投票し続けた。この点には、誰も異論がないであろう。一般的に言って、1910年までは、労働党の選挙での闘いぶりを、進歩的な自由主義と燦然と区別することはできないのである。

エドワード朝の自由党の成功は、非国教徒の気まぐれな復活に依拠したものであった、とは到底考えられない。これについては多くの証拠が挙げられつつある。1892年より、1910年に、政党間に更に鋭い宗教的対立があったという見方は、⁽¹²¹⁾全体として説得力に乏しい。事実、今日利用できる統計によれば、中産階級の多い選挙区ばかりではなく、非国教徒の多い選挙区も、保守党票と積極的な相関が認められるのである。⁽¹²²⁾

死者には、世論調査ができない。この分野で仕事をしている歴史家は、時折このことを悔やんできた。だがデイビッド・バトラー (David Butler) 博士とドナルド・ストークス (Donald Stokes) 教授は、1963年の調査の対象となった人々に、過去の記憶を辿らせ、歴史研究に標本調査を活用した。博士達は、このやり方で、いくつかのグループの過去の投票行動のパターンを描き出している。博士達の研究は、宗教的な対立が、政治的な忠誠心に及ぼした影響の遺産を明かに示している。1918年以前に成人した労働者階級の有権者のうち、アングリカンの信者の50%が保守党支持であった。これに対して非国教徒信者の保守党支持は、19%であった。⁽¹²³⁾有権者の階級的な結束は、1920年代に起ったが、それまで自由党を支持してきた人のうち、ごく一部だけが労働党支持に移った。博士達はこう主張している。⁽¹²⁴⁾

この見解は、表面上は、既に筆者が述べたことと歴史的な意味合いを異にする。しかし矛盾は、主としてタイミングの問題であり、資料の出典から説明することができるよう思われる。オーラルな証言にもとづいた歴史には、さまざまな長所がある。だが時代を細かく区分することは、オーラルな証言には決して向いていない。バトラー博士達も示唆しているように、回想は信頼性が乏しい。これは解釈の上で注意を要する。⁽¹²⁵⁾加えて、記憶の誤りは、おそらく特定の形態をとっている。父親の世代の自由党の支持率が過小評価されている、とされている点は、重要な意味を持っている。⁽¹²⁶⁾非国教徒ではない労働者階級が、福祉政策のために自由党を支持した場合。こうした自由党支持は、博士達の手法では、一番捕捉されにくい。また、1910年選挙で投票した可能性のある最も若い有権者は、1888年7月生まれで、1963年には75才であり、1918年以前の選挙についての情報は、極めて疑わしいことも付け加えておくべきであろう。

1885年以前についての政党支持の暫定的な推定値が、自由党支持を過小評価している (労働党支持を過大評価している) ことは間違いない。⁽¹²⁷⁾この著しい過大評価からすれば、1918年以前の

階級的な構成についての評価も、憶測に過ぎないように思われる。

とはいえこの標本調査も、エドワード時代の人々が選挙について抱いていた実際の認識に近い興味深い回想を、全く排除しているわけではない。ある施盤工は、ロイド・ジョージが、失業保険を導入して、金持ちをへこませようとしたことを覚えていた。⁽¹²⁸⁾ また労働者階級の保守党员との次のようなインタビューも載せられている。⁽¹²⁹⁾

「昔のトーリーの政府は一あの古いジョゼフ・チェンバレンの時代の政府なんかは、本当にひどかった。連中は、労働者階級なんか、何とも思っちゃいなかった。連中は、がちがちのトーリーだったんだ。今のトーリーの政府は、時代が変わったんで、大きく変わっちゃったんだよ。

質問：貴方は、その時代だったら、トーリーでしたか。

答え：いやわしは、自由党だったろうね。」

(10)

こうした変化は、選挙が全国的な選挙へと発展していった過程と、どのようにかかわっているのでしょうか。これが最後に考察すべき点であろう。1915年にはまだ、ノリッジ (Norwich) では、「地方の感情が階級的な偏見のもとたす有害な変化に、抵抗している」と記されている。⁽¹³⁰⁾ 地方の感情と階級的な偏見とを、二つの対立するものとして捉える。このことは、当然だと思われていた。政治が階級についての問題でないかぎり、地方のコミュニティは、一定の自律性を保った。そして地方のコミュニティの内部では、あらゆる政治的な影響力が行使されたのである。そうした伝統の中では、1847年のスカバーバラ (Scarborough) のように、全国的な政治問題をもちこもうとしても、それは失敗に終る運命にあった。⁽¹³¹⁾ ヴィンセントが示しているように、全国的な政治は、浅薄で幼稚な政治だと考えられていた。これに対して地方の政治は、深刻で理性的な政治だと考えられていたのである。⁽¹³²⁾ 後にヴィンセントは全国的な集団への帰属意識によって、地方の諸集団を理解すべきである、と唱えた。だがこの見解は、一貫していないし、さまざまな批判に曝されている。⁽¹³³⁾

全国的な選挙キャンペーンに対しては、今だに制度的な障害があった。にもかかわらず、1880年までには、個人的な影響力ではなく、政党の影響力が支配的な力になったと考えられるようになった。バルフォアは、選挙結果に皮肉なコメントを加えている。「敗北は、すべて地方に原因がある。地方の問題が、全部一方の側に味方したのだ。」⁽¹³⁴⁾ 統計も、この見解を支持しているように思われる。事実、1841年以後、まず地域的な基盤の上に、一定のパターンが現れ始め、1874-80年には、より全国的な世論が現われた。1863-85年に顕著となった地域の間の違いは、第一次大戦後には、次第に全国的なパターンに道を譲っていった。⁽¹³⁵⁾

しかし、19世紀後半には、政治は、依然本質的に地方の文化の境界の中にあるものとみなされていた。全国的な世論が登場しても、こうした見方は弱まらなかった。地方は、驚くほど全国的

な世論に影響を及ぼし、全国の世論を変容させたのである。地方貴族は、これに対応して、有利な地歩を保っていた。例えばノーフォーク南部では、1890年代には、「有権者は、トーリーでも自由党でもなく、純粋で単純な、ティーラー議員の支持者であった」。ブラックバーンでも、1910年まで、ホーンビー議員の支持者の結束は崩れなかった。⁽¹³⁶⁾ 更に、ペリング博士の選挙社会学の開拓的な業績によれば、1910年に至るまで、投票行動には地方毎に大きな違いがあった。1906年のトーリーの大敗北の後で、政治はようやく事実上全国的なものとなる。⁽¹³⁷⁾ 北西部の選挙結果が示している限り、これは、かなり確実である。もっとも、投票が進行して行く中で発揮されると言われるバンド・ワゴン効果は、全国的な世論の影響力を示す指標とされているものの、どんな時期についても、全く架空のものであった。⁽¹³⁸⁾

1918年以後、状況は一変する。民主的な選挙制度が確立し、10年以内に女性も、男性と同じ条件で、投票を許された。選挙権登録制度も改革された。複数投票は制限され、最終的には廃絶された。⁽¹³⁹⁾ 更に、左翼政党は、全面的に変貌しつつあった。第一次大戦以前、労働党と自由党は、広範な基盤を持った革新主義の運動の中で活動していた。第一次大戦後、自由党は分裂した。工業地帯における自由党の基盤は、深く侵食された。1923年には、自由党が農村の急進主義を糾合するチャンスはまだ残っていた。しかし、自由党はこの機会を捉えるのに失敗した。⁽¹⁴⁰⁾ 今や労働党が、完全に自立した政党として確立され、イングランドの都市近郊の革新主義運動を引き継いだ。この時点でも、歴史過程は、まだ完全にその進路を明確にしていなかった。バンベリー (Banbury) とグロスopp (Glossop) の研究が示すところでは、老人の政党支持は、現在よりも過去に制約されている。これは、保守党を支持する労働者階級のかかなりの部分が、現代の労働党が出現する前に育った世代であることを、強く示唆している。これより後の世代が有権者になると、労働党は、当然占めるべき地位を占めるようになったのである。⁽¹⁴¹⁾

もっとも、圧倒的に労働党支持が強い有権者でも、保守党政府を決して選ばない、というわけではない。1968年9月に行われた調査は、次のような結果を示している。⁽¹⁴²⁾

一般的に言って、あなたは保守党の支持者ですか	保守	労働
労働党の支持者ですか、それとも自由党の支持者ですか。	38%	44%
もし明日総選挙が行われた場合、あなたは	保守	労働
どの政党に投票しますか。	41%	33%

このように労働党は、保守党よりも多数の潜在的な支持者を抱えているが、労働党が支持者を動員するのは、保守党よりも難しい。これは政治的な亀裂が階級の違いを反映している、という基本的な事実を、覆い隠すものではない。肉体労働者は、1960年代までに労働党の固い支持者となった。中産階級は、保守党の支持者となった。店員などの境界的な職業を、中産階級に数える

とすれば、各々の支持率は、各階級のおよそ75%にのぼる。⁽¹⁴³⁾

しかし階級は、その他の社会的な影響力がかつて行使されたのと同じような仕方、その影響を及ぼしている。今でも 政治行動を準拠集団という観点から分析することは、可能である。労働者階級の投票態度の変化を、相対的な収奪という側面を特に強調して解釈する研究業績もある。⁽¹⁴⁴⁾ ようやく今日になって、政治的に突出した意義を持つ準拠集団は、階級的な基調を帯びるようになったのである。

家庭の政党支持こそ、各個人の投票行動を予測する最も重要な要因である。今ではこの点については、はっきりした証拠がある。保守党支持の家庭の子の89%の最初の政党支持は、保守党であった。労働党支持の家庭の子供の92%も、労働党支持であった。⁽¹⁴⁵⁾ 必要な修正を施せば、ヴィクトリア時代の家庭の子供についても、同じように強い家庭の影響が認められるであろう。もちろん、劇作家ギルバート (G.S.Gilbert) もこれから逃れられなかった。更に、政党の党派的な活動は、自らを強化し、変化に抵抗する性癖がある。これも決して新しい現象ではない。⁽¹⁴⁶⁾ バトラーとストークが示しているように、「通常、有権者の選択は、突然行われるものではなく、何か月、何年、何世代にもわたる産物である。」⁽¹⁴⁷⁾ 初期の選挙について研究する者も、これに異見をさしはさもうとは考えない。習慣と伝統が投票行動において持つ重要性。このことは、習慣と伝統の変化を探ることの重大な意義を改めて明らかにしているのである。

【注記】

(107) Dunbabin 'Parliamentary elections', table 4. p.92

(108) K.O.Morgan, *Wales in British Politics 1868-1922* (Cardiff, 1963) pp.158-60参照。実際モーガンは、別のところで1900年ではなく、1895年こそ、1868-1918年の時期における特異な選挙であったと書いている。そして1900年における自由党への票の移動は、親ボーア熱を示すものではなく、通常の状況へ復帰したことを示していると記している。ヘンリー・ベリングとの論争 'Wales and the Boer War', *Welsh History Review*, iv (1969), pp.377-8を参照

(109) Howarth, 'The Liberal revival in Northamptonshire', p.116.

(110) Paul Thompson, *Socialist, Liberals and Labour, The Struggle for London 1885-1914* (1967), p.107.

(111) Clarke, *Lancashire and the New Liberalism*, pp.166-7.

(112) Michael Craxton と H.W.McCready の Hansard Society のパンフレット *The Great Liberal Revival 1903-6* (1966) は、この問題についてあまり明快ではない。しかし1906年以前の補欠選挙についての事情を物語っており、有用な付録がついている。

(113) Thompson, *Socialists, Liberals and Labour*, pp.86, 295; Pelling, *Social Geography*, p.57.

(114) *Socialists, Liberals and Labour*, pp.179, 189; cf.p.170.

(115) *Ibid.*, p.167; 議席の配分については、App.A.pp.299-300, を参照。自由党と労働党は、一緒に数えられている。

(116) Clarke, *Lancashire and the New Liberalism*, pp.11-14. および App.A, pp.412-21.

(117) Clarke, 'British politics and Blackburn politics, 1900-1910', *Hist.Jnl.*, xii (1969), pp.302-27.

(118) Morgan, *Wales in British Politics*, pp.216-18, 249-55; および Cyril Parry, *The Radical Tradition in Welsh Politics: a study of Liberal and Labour politics in Gwynedd 1900-1920* (Hull, 1970), pp.15-21. を参照。

(119) Bealey and Pelling, *Labour and Politics*, 特に6、10、11章。H.A.Clegg, Alan Fox and A.F.Thompson, *A History of British Trade Unionism since 1889*, vol.i (Oxford, 1964) 特に7章と10章。

- (120) Pelling, *Popular Politics and Society*, pp.110-114; また Roy Gregory, *The Miners and British Politics 1906-1914* (Oxford, 1968) 特に pp.188-90の有益な研究を参照。
- (121) Michael Kinner, *The British Voter. An Atlas and Survey since 1855* (1968) p.34. この結論は、キーナーが比較している基礎となっている農村と小さなバラに、その有効性が限定されている。
- (122) T.J.Nossiter, 'Recent Work on English elections', *Political Studies*, xviii (1970) pp.527-8. 彼によれば「この時期の宗教と投票行動の関係についての伝統的な解釈には、明らかに大きな誤りがある」。
- (123) Butler and Stokes, *Political Change in Britain*, pp.124-34. これは、1950年代にバンベリーとグロシップで行われた調査の結果を確認している。この小さな都市ではどちらも、政党支持は、宗教的なステレオタイプによって影響を受けていた。Margaret Stacey, *Tradition and Change. A study of Banbury* (Oxford, 1960), pp.11-12, 15, 39-41, 175. Birch, *Small Town Politics*, pp.56, 80, 111-12.
- (124) *Ibid.*, pp.247, 252.
- (125) *Ibid.*, p.46.n.
- (126) *Ibid.*, p.250n. 1875年に生まれ、1900年前後に、結婚後自宅を持って選挙権登録を行った労働者階級の男性を想定して見よう。彼の息子は、1905年に生まれ、父が1906年ないし1910年に自由党に投票をしたのを覚えているにはまだ幼すぎる。この息子が覚えているのは、父が、第一次大戦後頻繁に行われた選挙—1918年、1922年、1923年、1924年の選挙で労働党に投票したことである。1963年に、この息子は、バトラーとストークスの質問票の質問39 aに接する。「貴方の父は貴方が小さいとき、特定の政党を支持していましたか？」どの政党とこの息子は書くだろうか。どんな答えが出るかはかなり明らかであろう。
- (127) *Ibid.*, p.320.
- (128) Robert Mckenzie and Allan Silver, *Angels in Marble. Working class Conservatives in Urban England (1968)*, pp.238-9. もちろん、これは全体を表す証拠だとは考えられない。結局、彼は「人民の側」から転向した自分を正当化する非国教徒であったのかもしれない。
- (129) Pelling, *Social Geography*, p.104に引用。
- (130) Gash, *Politics in the Age of Peel*. p.210.
- (131) *The Formation of the Liberal Party*, p.xv.
- (132) *Pollbooks*, p.29; Moore 'Political morality', p.20n.
- (133) Lloyd, *General Election of 1880*, p.140.
- (135) Nossiter, 'Voting behaviour 1832-1872', pp.386-9; 'Aspects of electoral behaviour', pp.180-5. 無投票の選挙区の減少、とくにイングランドにおける減少もこの観点から考えることができる。Trevor Lloyd, 'Uncontested Seats in British General Elections, 1852-1910', *Hist. Jnl.*, viii (1965), 260-5.
- (136) Pelling, *Social Geography*, p.100; Clarke, 'British politics and Blackburn politics' .pp.303ff.
- (137) *Op.cit.*, p.416.
- (138) Lloyd, *General Election of 1880*, p.26; Clarke, *Lancashire and the New Liberalism*, pp.374-5. O'Leary, *Elimination of Corrupt Practices*, pp.124, 212-13. は、反対の見解を主張しているが、それを支持する証拠は何も示していない。筆者はこれを世論調査の効果と比較してみた。この対比は、1970年総選挙の経験からみて有効と思われる。この時、有権者の多数は初めて世論調査の結果を知ることができたが、にもかかわらず、投票の結果は、労働党に有利なバンド・ワゴン効果を産み出しはしなかったのである。Micheal Pinto-Dunshinsky, *The British General Election of 1970 (1971)*, p.180.参照
- (139) D.E.Butler, *The Electoral System in Britain since 1918*, 2nd edn. (Oxford, 1963) 特にpp.8-9, 33-4, 113-15, 144-8.参照。
- (140) Chirsi Cook, 'A strange death of Liberal England', in A.J.P.Taylor (ed.) *Lloyd George (1971)*, pp.307-8
- (141) Stacey, *Tradition and Change*, pp.46-7; Birch, *Small Town Politics*, pp.110-12; Butler and Stokes, *Political Change*, pp.109-110.
- (142) Micheal Pinto-Dunshinsky, *The British General Election of 1970*, p.340n.
- (143) この分野における最近の発見について、明確に述べたものとしては、Peter G.J.Pulzer, *Political Representation and Elections in Britain (1967)*, pp.98-107.
- (144) Runciman, *Relative Deprivation and Social Justice* 特に pp.151-244.

(145) Butler and Stokes, *Political Change*, pp.47-51.

(146) *Ibid.*, p.57.

(147) *Ibid.*, p.419.

【訳者あとがき】

新しい資料を発掘し、斬新な方法でメスを入れ、歴史像を根底から覆す。これが歴史家の目指す知的な冒険である。実際にこの冒険をなし遂げうる歴史家は数少ない。だがこの論稿の筆者ピーター・クラーク教授は、おそらくそうした一人に数えられるであろう。

クラーク教授は、1942年に生まれた。1960年にケンブリッジ大学のセント・ジョンズ・カレッジに入り、歴史学を専攻して1967年に博士号を取得。ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジに奉職した後、1980年にセント・ジョンズ・カレッジに戻った。現在はケンブリッジ大学の近代イギリス史の正教授を務めるとともに、王立アカデミーの会員として、19世紀末から20世紀のイギリスの政治について精力的に著作を発表している。また教授は、タイムズ文芸時評や、ロンドン・ブック・レビューの書評者として頻繁に登場し、文字通りイギリスの現代史学会の第一線を担っている。

クラーク教授は、常に通説に大胆に挑戦してきた。まず教授が最初に世に問うた『ランカシャーと新自由主義』(*Lancashire and the New Liberalism*, Cambridge, 1971) は、新しい資料と方法を駆使して、エドワーディアン・リベラリズムに関する通説に真っ向から挑んだ研究であった。20世紀初頭のイングランド北西部の選挙を扱った教授の学位論文を基礎としたこの著作は、当時ようやく始まったばかりの選挙研究を、現代史の重要な分野として確立した。そして選挙過程の詳細な分析を通じて、教授は、20世紀初頭の自由党の復興の基盤を、労働者階級の支持に求める画期的な見解を打ち出したのである。

伝統的な政治史は、政治家の密室での駆け引きのようなハイ・ポリティックスに焦点を集めてきた。教授の研究は、こうした伝統からの大胆な脱却の試みであり、現代史研究全体に大きな衝撃を与えた。だがそれだけに、教授の研究は鋭い批判に曝されることになる。グラッドストーンの伝記や、自由帝国主義の研究で知られるオックスフォードの歴史家マシュー (H.C.G. Matthew) や、労働党史の研究者マクキビン (K.I. McKibbin)。こうした気鋭の学者が、クラーク教授に公然と論争を挑んだ。こうして始められた20世紀初頭の自由主義の性格と基盤をめぐる華々しい論争は、今も活発に続けられている。一方、教授の著作を先駆けとして、ヴィクトリア時代から20世紀中葉に至る選挙の研究が、その後陸続と出版され、選挙分析は、今や歴史研究に不可欠な道具となっている。

教授の第二作『自由主義者と社会民主主義者』(*Liberals and Social Democrats*, Cambridge, 1978) は、ホブソンやホブハウスといったエドワーディアン・リベラリズムのイデオログを取り上げた研究である。ある意味では、この研究は処女作で打ち出されたテーゼを、インテレクチュ

アル・ヒストリーの側から補完しようとする意図を持っていた。

いわゆる新自由主義の政治思想については、期せずして同じ年にオックスフォードのフリーデン (Freedon) も、より政治理論的なアプローチにたつ優れた研究を発表していた。20世紀初頭のイギリスの自由主義思想が持つ革新的なエネルギーは、それまでフェビアンや労働党の勃興の影に隠されていた。クラークとフリーデンは、これを歴史研究の最前線に押し出したのである。こうした解釈は、その後、コリーニ (Collini) のホブハウス研究や、アレット (Allet) のホブソン研究、マルキアンド (Marquand) のマクドナルド研究にも受け継がれ、今では通説的な地位を占めるに至っている。『自由主義者と社会民主主義者』が研究史上に持つ意味や、フリーデンの研究との重大な違いについては別に指摘したが、(拙稿「自由帝国主義と新自由主義」(二)『大阪外国語大学論集』第10号所収) この研究でクラーク教授は、思想を論理的な構造物として捉え、その論理を再構成するというより、思想の持つ意味を具体的な歴史の文脈において理解しようとする姿勢をとっている。これは、ケンブリッジの政治思想史家スキナー (Skinner) が提唱した *contextualization* のアプローチを適用したものと言うことができよう。レッサーなテキストが織りなす幅広いコンテキストに即して、思想の意味を把握する。この手法は、その後さまざまな領域で広くとりあげられ、イギリスの精神史を塗り替えてつある。

教授の第三作『ケインズ革命の形成』(*The Keynesian Revolution in the Making 1924-1936*, Oxford, 1988) も、同じアプローチを適用し、歴史家の立場から、ケインズ経済学の形成のプロセスを描いて注目的となった。経済理論家としてのケインズは、学説史家によって子細に研究されてきた。だがここで教授は、当時の政策論争を物語る膨大な資料を新たに発掘し、経済の理論家ではなく、新自由主義を継承する政策的な助言者、実践的な行為者としてのケインズの実像を浮き彫りにした。教授は、行政史家の業績を引き継ぎながら、ケインズの論戦の相手方であった大蔵省の官僚とチャーチルの考え方に精査を加えた。そして彼らが依然古いフリー・トレードとチープ・ガバメントのドグマに囚われていた事を改めてあばきだし、一見矛盾に満ちたケインズの時論を、政策論戦の中に据え直したのである。

グラッドストーンからサッチャーまでの13人の政治家についての伝記的素描を集めた教授の最新作『リーダーシップの問題』(*A Question of Leadership*, Cambridge, 1991) は、こうした専門的研究とはやや趣を異にした一般向けのエッセイである。イギリス現代史学会を代表するもう一人の歴史家モーガン (K.O.Morgan) も、数年前、労働党指導者の肖像を集めた書物『労働党の人々』(*Labour People*, Oxford, 1987) で好評を博した。モーガンのそれと同じく、クラーク教授の書物も、現在の研究水準を凝縮したイギリス現代史への格好の入門書として高く評価され、メイジャー首相についてのエピソードをつけ加えた上で、装丁を新たに、ペンギンから廉価版が出版されている。

こうして教授は、一貫して斬新な方法を用いて、伝統的な理解に挑戦してきた。ウィットに富んだ教授の文体の中には、通説にとらわれない自由な精神と、精密なドキュメンテーションによっ

て、仮説を検証する堅実な姿勢が、緊密に統一されている。実証的であることは、決して古文書を棒読みすることではない。常識に挑戦する勇氣と、けし粒ほどの断片も見落とさない細心さ。この両者の結合こそ、理論にもたれかかることなく、事実在即してものを捉えようとする経験論的な学問の大道なのであろう。

ここに訳出した論文は、教授の初期の代表的な業績の一つである。本稿は、『歴史』(History 57号 1972年)誌上に発表され、先に触れた『ランカシャーと新自由主義』での研究成果を踏まえて、19世紀末から20世紀中庸までのイギリスの選挙制度と、投票行動の研究上の論点を鳥瞰した論文である。ここで教授は、19世紀の選挙法改正のもっていた非民主性、19世紀の選挙におけるさまざまな要因、とりわけ第三次選挙法改正後の選挙制度と投票行動の基盤について、従来の研究を吟味しつつ独自の学説を展開している。著者自身の主張は、第9節に要約されている。本稿は、イギリスの選挙史研究において常に筆頭にあげられる論文であり、この分野の蓄積が乏しい我が国では、今だに参照に値する論稿であらう。

もちろん先にも触れたように、本稿以後、イギリスの歴史的な選挙研究は大きな発展を遂げた。今日の研究水準を踏まえると、ここで教授が提出した命題は、必ずしもそのまま受け容れられるとは言い難い。教授が展開している階級論は、労働貴族論のような階級の内部編成の問題や、文化的なヘゲモニーの観点を欠いている、という批判を招くかもしれない。また、ウエーバーの「階級」と「身分」のカテゴリーの解釈にも、疑義が出されるかもしれない。もっとも教授にとっては、こうした社会学的カテゴリーの定義より、具体的な歴史像が重要であらう。しかし、20世紀初頭に投票行動の基盤が宗教から階級へ転換したとする教授の解釈も、現在では、そのままの姿では、維持し難しくなっている。

マシューらへの反論の中で、クラーク教授も、既に20世紀初頭にも宗教的要因が一定の役割をはたしていたことを認めていた。しかし1993年春に教授が来日した際、関西学院大学と京都大学で行われた講演では、教授は更に踏み込んで、20世紀初頭にも「古き自由主義の価値」が大衆的な基盤を持っていたことを指摘していた。この点を質した筆者に対して、教授は、特に1990年に出版されたタナーの力作(Duncan Tanner, *Political Change and the Labour Party 1900-1918*, Cambridge, 1990)に言及され、この研究によって初期の見解を修正したことを率直に認められた。イギリスの政治文化の基層に横たわる「古き自由主義」の驚異的な生命力に改めて注目すべきである、という教授の結論は、激しい論争をくぐってきた当事者の言葉として、万金の重みを持って受け止めるべきであらう。

セント・ジョンズ・カレッジ教授の研究室を訪れた時、曲がりくねった階段を上がって扉を開けると、グラッドストーンの小さな彫像が、闖入者を睨み付けるように置かれていたことを思い出す。グラッドストーンからロイド・ジョージへと受け継がれたイギリス自由主義の戦闘的なポピュリズム。その基盤こそ、クラーク教授が一貫して探求してきたテーマだったのであろう。

(1994年5月10日 受理)